呪われた部屋と猫

家根川　颯馬

とあるアパートに、呪われていると噂の部屋があった。曰く、その部屋の主は、住み始めてからちょうど一か月後に死ぬ。死因は様々で、急な心臓発作の場合もあれば、人に殺されて死ぬ場合もあるという。今までの住人は、どのような対策をとった者でも、皆、死んだらしい。聞くところによると、暮らし始めて一か月めのその日、部屋を遠く離れて海外にいた人物も、落雷を受けて死んだそうだ。

そんな呪われた部屋に、ある男が引っ越してきた。独り身の男で、猫を一匹飼っていた。彼はその猫を溺愛していて、自由に使える分の金は、ほとんどその猫のために使っていた。

仕事から帰って、家で寝る。そしてまた仕事へ向かう。男の生活はその繰り返しだけで、自分のために金を使う暇がなかった。だから、自然と猫のために金を使うようになったのだ。その上、猫は仕事に疲れた男を癒す唯一の存在であった。男が猫に夢中になり、さらに金をつぎ込むようになったのも無理はない。

呪われた部屋に男が越してきたのも、そこに理由があった。普段から猫にばかり金を使っていた男は、猫のこと以外に対して、必要以上の金を使うことに抵抗を覚え始めていたのである。噂のせいで格安になっていたこの部屋に、男は一も二もなく飛びついた。

男がその部屋で住み始めてしばらくは、猫と一緒に平穏に暮らしていた。男は相変わらず忙しかったが、猫のおかげで幸福だった。

しかし、呪いの効果が出るという、暮らし始めて一か月めの日が近づくと、さすがに不安になってきた。借りた時は馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばしていたが、噂が立っているということは、それなりの事実があるということだ。実際に前の住人は、そのように死んだのかもしれない。そう思うと少し不気味だった。

もし自分が死んだら猫はどうなるのだろう、と男は考えた。恐ろしいことだ。自分がいなくなったとしたら、餌を与えてくれる者のないこの猫は部屋でひっそりと死んでしまうのだろう。万が一にでもそんなことが起こってはいけない。

男は、ちょうど一か月になる日の前日から、猫を親戚に預けておくことにした。もし自分が死んでも、猫を育ててくれるように言うと、親戚は気味悪がりつつも、了承してくれた。

男は一か月めのその日、死ぬのではないかと常に不安に駆られながら過ごした。もちろん、今日必ず死ぬと信じ込んでいたわけではないが、永遠に別れることになるのではないかと、猫のことが頭を離れなかった。

しかし、次の日になっても、男は死ななかった。なんだ、やはり根も葉もない噂だ。呪いなどなかったのだ、と男は安堵した。よし、これから親戚の家に行って、猫を連れて帰ってこよう。自分に会えなくて、猫は寂しがっていないだろうか。

憂いが消えた猫との生活に胸を膨らませながら、男は親戚の家にやってきた。

……ところが、男はそこで、猫の死を告げられた。住み始めてちょうど一か月になる日、猫が息を引き取ったというのだ。

仕えるべき主人を失った男は、途方に暮れた。

部屋の主は、その日、確かに死んでいたのである。